

# 千波湖環境学習会を開催しました

当協会は水戸市との協働事業で「千波湖環境学習会」を開催し、今年で5年目を迎えます。延べ2,631名という多くの市民の皆様に参加していただき、回を重ねるごとに本学習会の認知度が上がってきているのではないかと、大変嬉しく感じています。

この学習会は、市民が、千波湖やその周辺の自然環境の現状、水質浄化及び保全対策などについて理解を深め、今後の環境保全の在り方を考えていただくために、毎回、体験型のスタイルで行っています。

初回の5月18日は晴天に恵まれ、200名を超える参加者が集まり、「スワンボートで千波湖のプランクトンを調べよう」をテーマに千波湖畔の親水デッキを会場にして開催しました。

当日は、水戸市のマスコット「みとちゃん」が意欲溢れる子ども達を応援に来てくれました。参加した子ども達は指導員や参加した親たちと一緒にボートに乗って千波湖の採水に出かけました。戻ってきた参加者は数名のグループになって、講師から検査の仕方の説明を受けた後、自分で採取した水でCOD（化学的酸素要求量）のパックテストを体験しました。CODの数値は、噴水付近は6～10mg/lと低く、湖岸付近は15～20mg/lと高いことが分かりました。噴水付近は水が循環しているため汚れが少なく、桜川からの流入水が少なく水が滞留している湖岸付近は汚れていることがうかがえます。

この後、プランクトンについて顕微鏡で観察しながら学習する予定でしたが、時間が迫ってしまい実施することが出来ませんでした。残念でしたが次回以降の学習会で実施することを約束して終了しました。



【みとちゃんが来てくれました】



【みんなで記念写真】



【スワンボートで水を採取】



【パックテストの説明】



【採取した水でパックテスト】

最後に、今回、千波湖水質浄化推進協会からポケット顕微鏡を、(株)玄設計と(株)ジイエスケーからジュースを、それぞれ、ご提供をいただいたこと、水戸市マスコットの「みとちゃん」も学習会に華を添えていただきましたこと、併せて感謝申し上げます。また、今後もこの事業にご協力いただける会員事業所を募集しております。公益推進グループまでお問い合わせ下さい。

多くの皆様のご参加をお待ちしています。

## 千波湖環境学習会を開催しました

当協会は、水戸市との協働事業として、体験しながら環境問題について考える「千波湖環境学習会」を、月1回のペースで開催しています。毎回、100名を超すたくさんの方に参加していただき、この学習会を通して、環境保全活動の輪が広がっていることを感じ、うれしく思います。

第2回目の6月1日は、茨城県環境アドバイザーの広瀬誠先生を講師に迎え、強い日差しが照りつける中、水戸ホーリー・ホックのマスコット「ホーリーくん」も駆けつけてくれ、「草原の昆虫と千波湖導水を調べよう」をテーマに実施しました。

最初に、千波湖に流入している桜川導水の働きや浄化の仕組みについてパネルを見ながら説明を受けました。千波湖には桜川から年間を通して一定量の導水があり、水質浄化に大いに役立っていることを学びました。

次に、四季の原広場まで昆虫観察に出かけました。そこで捕まえた昆虫を先生の所へ持って行き、その生態や特徴等について詳しく尋ねました。モンシロチョウやショウワリョウバッタなど約30種類を観察することができた中で、小学5年生の女の子が捕まえたラクダムシという昆虫がいました。中胸が膨れているところがラクダを連想させることからついた名前だそうで、体は細長く、背中が黄色と黒の縞模様になっている特徴があり、広瀬先生は「40年ぶりに見た！」と少し興奮しておられました。



【生物の調査】



【ミシシッピアカミミガメ】



【四季の原で昆虫採集】



【ラクダムシ】

第3回目の7月6日は、「千波湖ビオトープの魚を調べよう」をテーマに、当協会の職員が講師となり、水戸市が市民協働で平成24、25年にそれぞれ造成した、ハナミズキ広場および千波湖の東側のビオトープに入って、生息している生き物を採取して調査しました。ヨシノボリやウキゴリなど約13種類が確認できました。千波湖ビオトープでは特定外来生物のブラックバスや要注意外来生物のミシシッピアカミミガメが捕獲され、他の魚に影響を及ぼすため、処分しなければいけないということを学びました。

次に、千波湖、桜川、湧水の水質検査を行いました。生活排水が流れ込んでいる千波湖や桜川の水は、湧水よりも汚れているという結果に、みんなで水質改善に取り組んでいかなければいけないことを学びました。

今後の学習会は、7月27日に、「森林の昆虫とヒカリモを調べよう」、8月17日に、「千波湖内に入って水生生物を調べよう」、9月7日は、「周辺湿地帯の昆虫を調べよう」をテーマに実施する予定です。ぜひ、濡れてもよい服装でご参加下さい。

## 千波湖環境学習会を開催しました

当協会は、水戸市との協働事業として、体験しながら環境問題について考える「千波湖環境学習会」を、月1回のペースで開催しており、今年度はすでに6回実施しました。

7月27日は、「森林の昆虫とヒカリモを調べよう」、8月17日は、「千波湖内に入って水生生物を調べよう」、9月7日は、「千波湖周辺湿地帯の昆虫を調べよう」をテーマに行いました。

7月27日は、茨城県環境アドバイザーの小菅次男先生と、茨城生物の会の染谷保先生を講師に迎え、少年の森周辺に生息する昆虫とヒカリモを観察しました。

最初に、千波公園の斜面林を昆虫観察しながらヒカリモの生息地に出かけました。ヒカリモは水環境や日照条件などに影響されるため、今回は見ることができず、講師が用意したパネルで説明を受けました。

その後、少年の森周辺森林で昆虫を採集し、子供達は自分で採集した昆虫の種類や生態等について講師の説明を熱心に聞いていました。



【千波湖に入って生き物調査】



【ヒカリモについて説明】

8月17日は、当協会の職員が講師となり、千波湖に入って魚や水生生物を採取して調べました。

講師から湖内に入る時の注意事項を聞いて、協会が提供した魚取り網と飼育容器を持って、千波湖内に入りました。

参加した子供達は、親水デッキからボート小屋辺りまでの魚や水生生物を足で草をかき分けながら採捕しました。

水から上がった後、講師が前日に仕掛けておいたわなを、子供達がボートに乗り引き揚げました。合計12種類ほど捕れた魚や水生生物を水槽に入れて観察し、講師から生態や特徴などについて説明を受けました。

9月7日は小雨に見舞われましたが、茨城県環境アドバイザーの廣瀬誠先生を講師に迎え、ハナミズキ広場の湧水水路に入り、生息する生き物と、その周辺の昆虫を観察しました。

湧水水路では、網を使って魚や石の下に生息する水生生物を捕り、ウキゴリやヤマトヘビトンボなど10種類を水槽に入れて観察しました。

また、広場周辺の昆虫は、ナガサキアゲハやツマグロヒヨウモンなど24種類が採集でき、その生態等について学習しました。

今後の学習会は、10月19日に、「地球温暖化と植物の関係を調べよう」、11月16日に、「桜川に遡上するサケの産卵を観察しよう」をテーマに実施する予定です。多くの皆様のご参加をお待ちしています。



【採取した生き物の説明】

# 千波湖環境学習会を開催しました

当協会は、水戸市との協働事業として、体験しながら環境問題について考える「千波湖環境学習会」を、月1回のペースで開催しております。

7回目の10月19日は、「地球温暖化と植物の関係を調べよう」をテーマに、水戸地方気象台の滝沢勝彦氏を講師に迎え実施しました。

最初に、水戸地方気象台の業務について説明を受け、実際の測定に使用する雨量計の計測の仕方を学びました。また、地球温暖化のしくみや水戸市の気温や降水量の変化をパネルを見ながら勉強しました。温暖化の影響で、①気温は年々上昇している②降水量は減少している③桜の開花も早まっており、子供たちが大人になる頃は、卒業式頃になってしまうかもしれないとのことでした。

その後、千波公園斜面林に生育している植物の観察に出かけました。参加者は小さな草花を見つけると、講師の説明を熱心に聞いていました。また、千波湖畔では、ビオトープに植えられている水生植物の説明や、外来種のメリケンカルカヤが温暖化の影響で北上して来ていることを学びました。



【温暖化について講義】



【斜面林の植物観察】



【サケの遡上の講義】



【サケの産卵活動を観察】

11月16日は、「桜川に遡上するサケの産卵を観察しよう」をテーマに、茨城生物の会の荻沼正和氏を講師に迎え開催しました。

初めに、桜川や逆川に遡上するサケの話を聞きました。現在までの遡上数は約20匹で、昨年度の1/10だそうです。異常気象や水温上昇などの温暖化現象に影響されているのではないかとのことでした。

その後、1.6km先の美都里橋までサケに関するクイズをしながら歩き、遡上したサケの産卵活動の様子を観察しました。参加した子供たちは、橋の上から産卵床を掘るサケの姿や、産卵床に近づく他のサケを追い払う姿を見て、大変満足していました。

今後のは、12月7日に、「千波湖の湧水と歴史を探ろう」、1月18日に、「千波湖の渡り鳥を調べよう」、2月15日に、「桜川の卵から孵化したサケの稚魚を放流しよう」をテーマに実施する予定です。また、参加者にはこの事業にご協力いただけた会員事業所の皆様から、飲み物や文具等のプレゼントも予定しています。多くの皆様のご参加をお待ちしています。

## 千波湖環境学習会を開催しました

当協会は、水戸市との協働事業として、体験しながら環境問題について考える「千波湖環境学習会」を、月1回のペースで開催しています。

9回目の12月7日は、「千波湖の湧水と歴史を探ろう」をテーマに実施しました。

最初に、千波湖の地形の変化と水戸城の歴史について、パネルを見ながら説明を受けました。

その後、親水デッキから偕楽園の好文亭付近までを、偕楽園の歴史に関するクイズラリーをしながら散策し、吐玉泉の採水をしました。「好文亭の「好文」とはどんな意味か」とか、「南崖の洞窟は何の跡か」などの問題が出されました。「好文」とは、中国の故事で「梅」を意味し、梅を愛した斎昭公が命名したそうです。「南崖の洞窟」は、「神崎岩」と呼ばれた石を笠原水源の岩壠などに使うために採掘した跡といわれていることなどを教わりました。

また、千波湖、桜川、湧水の水質をパックテストで測定し、今回の調査を含め、四季を通じて変化する千波湖の水質調査結果をまとめました。



【野鳥観察の様子】



【観察したオシドリの様子】



【吐玉泉で採水の様子】



【南崖の洞窟でクイズの様子】

10回目の1月18日は、「千波湖の渡り鳥を調べよう」をテーマに、日本野鳥の会茨城県支部の関根一広先生を講師に迎え開催しました。

最初に、千波湖に多く飛来しているカモの種類について説明を受け、カモの大きさや生態について学びました。

次に、参加した子供たちがグループに分かれ、カモの名前を当てるクイズを行いました。出された問題は、カモの一部分を白黒にした写真が渡され、答えを探してデッキ周辺のカモを見たり、図鑑を見て調べていました。次のヒントで、その一部分がカラーにしてあったため、ほとんどのグループが正解をしていました。

この後、千波湖の東側と千波公園の斜面林を歩きながら野鳥の観察に出かけました。ビオトープでは、ヨシの合間にあまり見ることのできないオシドリのつがいが観察でき、参加者は順番に望遠鏡のレンズを覗いては、感動の声をあげるなど、大変満足していました。

今年度の学習会は、次回2月15日の「桜川の卵から孵化したサケの稚魚を放流しよう」で終了となります。千波湖好文亭前、親水デッキにて12時30分頃から受付を開始しますので、ご興味のある方はぜひお越しください。